

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520163

研究課題名(和文)パラオにおける日本語歌謡の収集と分析 民族音楽学的・言語学的観点から

研究課題名(英文)Collecting and Analyzing Japanese-influenced Palauan Songs from the Viewpoints of Ethnomusicology and Linguistics

研究代表者

小西 潤子(Konishi, Junko)

沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：70332690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本統治時代以降に日本語や日本の流行歌を参照して創作されたパラオの日本語(混じり)の歌(現地ジャンル名：テレベエシール。以下、パラオ日本語歌謡)を収集し、民族音楽学的・言語学的観点からその特徴を分析して、「パラオらしさ」を描き出した。また、パラオ日本語歌謡50曲を選びパラオ初の五線譜付歌詞集としてとりまとめるとともに、代表曲15曲のレコーディングとCD制作をし、現地に還元した。

研究成果の概要(英文)：This is a research and analysis of Palauan songs influenced by Japanese songs. As a result, we published a song book called "utahong", which contains 50 songs with staff notations and CD of 15 titles.

研究分野：民族音楽学

キーワード：パラオ 日本語歌謡 日本統治時代 民族音楽学 歌詞集

## 1. 研究開始当初の背景

両大戦間(1914-1945)に日本の統治下におかれたパラオ共和国には、多くの日本人が移住して農業、漁業、商業などに従事した。この時代、パラオの人々は日本語や日本の流行歌を参照して日本語(混じり)の歌を創作した。こうした歌は、*デレベエシール derebechesiil* [もしくは *chelitakl ra Belau* パラオの歌]というジャンル名で呼ばれるが、以下ではパラオ日本語歌謡と略称する。

パラオ日本語歌謡のもととなったのは、戦前日本からもたらされた学校唱歌を始め、《酒は涙か溜息か》などの流行歌、さらには日本に普及していた西洋のポピュラー音楽などであった。パラオでは、戦後も 青い背広 など日本の流行歌が好まれた。現在では、日本語を話せない若者もパラオ日本語歌謡を「クラシック」と見なし、パラオ現代歌謡の基盤と位置づける。

パラオ日本語歌謡の歌詞は、すべてが日本語のものから、パラオ語を中心に日本語の単語が入り込んでいる程度のものでさまざまである。音楽的には、日本の流行歌の替え歌または旋律の部分的借用、それらから派生した新作の旋律が用いられている。

このように、日本の影響を受けた歌を自らの伝統の一部として積極的に位置づけ、継承している例は、世界的に見てもまれである。しかしながら、これまでパラオ日本語歌謡に関する包括的な研究はなされてこなかった。

パラオの音楽研究としては、1963年 Barbara B. Smith によるサーベイ調査を経て、山口(Yamaguti 1967, 山口 1969, 1990) および山口の記録を統合したデジタル・アーカイヴス(2011年台湾師範大学・銭善華教授のプロジェクトチームによる)があるが、これらにパラオ日本語歌謡は含まれていない。また、ドイツ人探検家が残したワックス・シリンドラー録音(1909年、ベルリン・フォノグラム記録保存所保管)を使った Abels (2008) の音楽構造分析研究では、パラオ日本語歌謡にわずかに触れているが、歌詞を扱っていない。

筆者自身は、1990年代からパラオの行進踊り・マトマトンに関して、旧南洋群島等との様式比較を行っている(小西 2003, 2004, Nagaoka and Konishi 2007)。これらの研究の中では、行進踊りの伴奏音楽としてパラオ日本語歌謡の一部の曲をとりあげたことはあったが、パラオ日本語歌謡そのものに焦点をあてた研究はまだ行っていない。

## 2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、いまだに網羅的な研究が行われてこなかったパラオ日本語歌謡の収集、分析によって類型化を行い、「パラオらしさ」を描き出すことである。これを遂行する過程において、さらに次のような目的が設定される。

まず第1に、パラオ日本語歌謡に関するで

きるだけ多くの資料や歌詞、音源などの基本データを収集することである。第2に、本研究についてパラオの人々に周知し、理解と協力を求めることである。第3に、パラオ日本語歌謡についての採譜の手法を確立することである。

近年の民族音楽学やポピュラー音楽研究においては、五線譜を使った採譜が音楽を固定するものとして批判されてきた。電子化や情報ネットワークが広まる中で、紙媒体での保存も議論すべきである。しかしながら、パラオにおけるインターネット状況、電子ファイルという様式による記録の持続可能性やアップデートの必要性などの課題がある。パラオ日本語歌謡の保存には、まずは音楽を紙媒体にすることが最も適するが、ヴァリエーションの処理や歌詞の当てはめ方の問題を解決する必要がある。

第4に、パラオ日本語歌謡の歌詞と旋律の分析基準の設定をする必要がある。そして第5に、研究成果の調査対象地域への還元方法を策定することが求められる。歌が次世代にまで共有されるためには、歌詞、歌詞の意味、採譜、音源を1セットとした歌詞集を提供することが必要である。

## 3. 研究の方法

### (1) 基本データの収集

まずは、先行するデータの有無について情報収集する。日本国内で入手できる文献は限られているため、ほとんどをパラオの公立図書館、パラオ唯一の高等教育機関であるパラオ・コミュニティ・カレッジ図書館および現地協力者を通して収集する。

音源資料については、1980~90年代の商業録音カセットテープがある。その多くをすでに入手しているが、追加資料を WWFM ラジオ局のダビング・サービスを利用して入手する。

歌詞の意味については、研究協力者への聞き取り調査が不可欠である。単純な翻訳だけでは歌詞は意味をなさないため、パラオ日本語歌謡についての知識を有し、かつ歌詞の解釈能力に長けていること、日本語または英語の翻訳および書記能力を有する人物に協力を求める。そして、本調査の目的を理解し、多くの時間を費やすことに同意を得る。

### (2) 公開シンポジウム

文化外部者による独りよがりな調査研究とならないために、パラオ国内外から研究者、関係者を招聘してシンポジウムを開催し、パラオ国民に公開して、意見を求める。その打ち合わせをパラオ・コミュニティ・カレッジのハワード・チャールズ准教授、フォースティナ・K.ルーラー・マルグ文化大臣(当時)、共同研究者の首都大学東京・ダニエル・ロング教授を交えて行い、“Back to the Future: Palau's Japanese Era and its Relevance for the Future” と題して設定することとした。

議論の中心は、日本統治支配時代における

パラオへの文化的影響であるが、パラオの次世代を担う若者の学びの機会とすること、また、年配女性グループを招聘しパラオ日本語歌謡の実践の場を提供することで、抽象的な議論に終わらないものとする。

### (3) 歌詞の表記と採譜

歌詞の表記については、日本語部分についてもパラオ語による正書法に原則従う。ただし、原典における明らかなタイプミスや情報収集によって得られた内容に従っての修正は適宜行う。音源や他の資料との比較によって、詩節が前後して記録されているものについては、歌詞全体の整合性や情報提供者による解釈をもとに、修正を加えることとする。

歌詞の創作者名、創作年、歌詞中の登場人物名等、パラオ日本語歌謡を理解するうえで有益な情報は、歌詞とともに記す。ただし、こうした情報が得られないものも多くあるため、全体での統合をはからない。

採譜は、カセット録音された既存の音源をもとに行い、新たに収録する曲については収録後に修正を加える。リズムやアレンジが時代や演奏者によって大きく異なるため、音楽学者以外が聴いた場合には別の曲のように聴こえる音源もある。明らかに演奏者が音楽的な表現としてフレーズやリズムを変更したのものについては、休符をカットしたりリズムを単純化したりして、なるべく原曲の旋律に近いかたちで採譜する。

譜割りは、原則として1番の歌詞を基準として、2番以降の歌詞で著しく異なる場合には、通作形式での採譜を行うこととする。また、多くの人々が歌いやすくするために、なるべく単純な調子記号となるように音源から移調する。

### (4) パラオ日本語歌謡の分析

分析対象とする曲の条件は、歌詞が揃っており音源と同定できること、日本語訳を得られたものとする。とりわけ、複数の録音音源があるものや、情報提供者が聴いたことがある曲を優先し、パラオ日本語歌謡のうちでもよく知られるものへと絞り込んでいく。

分析対象曲について、歌詞内容をもとに、主題によって分類する。そして、各主題とパラオの文化的・社会的脈絡について分析考察する。

次に、歌詞において使用頻度の高い日本語の単語例を整理する。パラオの言語調査を行っている Long と Imamura は、パラオ語にはたくさんの抽象的な事柄をさす日本語が借用されていると指摘する (Long and Imamura 2013, 79)。パラオ日本語歌謡に頻出する抽象的な感情表現の語は、実はパラオ語にもある。それをわざわざ日本語に置き換えて使っている点が注目に値する。

音楽面については、調性(長調か短調か)・音階(ヨナ抜き音階のときに特記)・基本的拍子(途中の変拍子部分は除く)・曲調(「南

洋風」「演歌[軍歌]風」「西洋風」またはそれぞれの混合)という観点から分析する。

南洋風の曲調とは、主音と属音の結びつきが強く、主音と属音との間をスライドするように音が揺れ動くのを特徴とする。旧南洋群島内においては、早い時期に宣教師が入った東に行くほど、南洋風の旋律が占める割合が大きくなる (Nagaoka & Konishi 2007, 124-128)。

### (5) 採譜付歌詞集の編纂とレコーディング

収集した情報を整理し、パラオ日本語歌謡の歌詞集を仕上げる。その際、研究報告書としての質的保証を保ちつつも、現地への還元重点をおく。また、収録曲のうち代表となる曲を選び、チャールズ准教授の協力のもとで新たにレコーディングをし、付帯 CD を制作する。

## 4. 研究成果

### (1) 基本データの収集

#### 先行採譜集

パラオ日本語歌謡の採譜付歌詞集の先行例として、ガラルド州出身のイメセイ・E・エゼキエル (1920 - 没年未掌握。以下、通称に従ってイメセイ) の学校用教材を収集した。イメセイが創作した多くの教材は、日本の流行歌を含む外来曲の替え歌であった。

その他の採譜例は、讃美歌である。讃美歌は、フィリピンの教会学校から持ち帰った曲にパラオ語の歌詞をあてはめたものである。以上のように、パラオにおいて五線譜で採譜されたものは、これまでは学校用教材か讃美歌しかなかった。

#### 歌詞

パラオ日本語歌謡の総曲数は不明である。その数の多さから、パラオの人々がいかにパラオ日本語歌謡を愛唱してきたということが示される。チャールズ准教授は、240 曲のパラオ日本語歌謡の歌詞を収集しデータ化している。しかし、スペルの間違いや重複掲載された曲が含まれるなど、整備の必要があることがわかった。

元・国立高齢者センター長官リリアン・ウルドゥン氏も、デイケア・センターで高齢者から歌詞を収集し 180 曲を収めた 2 冊の歌詞集として自費出版している。しかし、同様にチェックの必要があることがわかった。

#### 音源

既存の歌詞集からは、旋律の手掛かりが全くつかめないことが大きな問題である。研究代表者は、1990 年代にパラオ音楽研究の先人である大阪大学・山口修名誉教授より、パラオ日本語歌謡のカセットテープ 30 本以上を個人的に譲り受けたものを所有している。それらを扱いやすくするために、まず CD に変換した。

また、WWFM 主宰の Alfonz Diaz も 1980 ~

90年代に販売されたパラオ日本語歌謡の cassette テープ録音をデータ化して、顧客が選んだ曲を CD に焼いて販売している。上記の山口コレクションとともに、Diaz コレクションから日本語のタイトルを持つ曲を選び、調査対象に加えた。

Diaz コレクションは、曲目名から音源を引出すことはできるが、実際に聴いてみないと異名同曲を判断できない。また、提供されるのは音源だけなので、歌詞に関する情報は別のところから手に入れなければならない。

入手した音源について、特に出だし部分(ほとんどがパラオ語)の歌詞を手がかりとし、上記 250 曲ほどの歌詞と照合して曲のタイトルを同定した。こうして 75 曲ほどが同定できた。

### 歌詞の日本語訳

歌詞の日本語訳収集には、沖縄系パラオ人の金城フミコ氏の調査協力が不可欠であった。金城氏は、パラオ語、日本語、英語の書記能力があり、80 歳を超えた現在でもてきぱきと仕事をこなしている。その合間に、音源を聴きながらの歌詞チェックと 1 曲ずつの歌詞を見ながらの日本語訳口述を行った。

解釈を伴わないと意味の整合性がとれない歌詞もたくさんあるなかで、金城氏はていねいに意味をとりながら日本語訳をしていた。この作業により、本研究では 42 曲の日本語訳が得られた。主にこれらを対象に分析を行った。

### (2) 公開シンポジウム

公開シンポジウムの発表者およびタイトルは、以下のものである。実施後には英文による報告書を作成し、パラオ・コミュニティ・カレッジにも提出した。また、同学内報にも本シンポジウムについての記事が掲載された。

- **Tutii Chilton**, Dean of Academic Affairs: Remarks
- **Yoshiyuki Sadaoka**, Japanese • Ambassador to the Republic of Palau: Remarks
- **Kerai Mariur**, Vice President of the Republic of Palau: Remarks
- **Daniel Long**, Tokyo Metropolitan University “Archiving the Japanese Language Oral History of Palau for Future Generations”
- **Keisuke Imamura**, Tokyo Metropolitan University Graduate School: “Why is it important for Japanese to know about Palau’s past?”
- **Shingo Iitaka** Kochi Prefectural University: “Reviewing Visual Images of Palau from the Japanese Administration Era”
- **Yoshiyuki Asahi**, National Institute for Japanese Language and Linguistics: “The Importance of Linguistic Research on the former Japanese Colonies”

• **Shinji Sanada**, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Nara University: “A Japanese-lexicon Creole in Taiwan”

• **Yoshimichi Mizuno** Kyoto Institute of Technology

• **Community elders**: Musical performances of Japanese-Palauan songs

• **Junko Konishi**, Shizuoka University: “Japanese Influenced Songs in Palau”

• **Ryota Yoshida**, Shizuoka University Graduate School: “Why is the archival of Palauan songs important for the future?”

• **George Shan-Hua Chien**, National Taiwan Normal University (NTNU): “The Web Museum of Palauan Music”

• **Vivian, Chiao-Wen Chiang**, National Taiwan Normal University: “Constructing the Austronesian Music Museum”

• **Howard Charles**, Palau Community College: “The Impact of Music Education and Performance in Palau's 2011-12 School Year”

• **Osamu Yamaguchi**, Nanhua University: “Transgender love songs of Belau and Japan sung by Belau people: with emphasis on the 1960s”

### Closing Remarks

• The Honorable **Faustina K. Rehuher-Marugg**, Minister of Community & Cultural Affairs

• **Bilung Gloria Salii** Queen, traditional women leader

• **Kathy Kesolei**, Senate Vice President

### (3) 採譜

採譜には、専門的な音楽ソフト Finale を用いた。採譜作業には、ミクロネシア諸語の聞き取り能力を要するもので、音源と歌詞データを突き合わせながら 1 曲ずつの採譜を行った。

フレーズの開始音と単語の切れ目を聞き取り譜割りをするうちに、感覚的にパラオ語の音節構造が次第につかめるようになった。そして、最初の頃に採譜したものの誤りを修正できるようになった。

### (4) パラオ日本語歌謡の分析

パラオ日本語歌謡のうち分析対象とした 42 曲の主題をまとめたところ、「恋愛歌」が 33 曲 (No. 1 ~ 33, 79%) と圧倒的に多いが、その他にも「望郷」「死別」「近代的な仕事」「教訓」に関する歌もあることがわかった。

恋愛歌について、歌詞の日本語訳をもとに、

1. 喜び (1 曲)
2. 社会的失恋 (4 曲)
3. 不運の嘆きとあきらめ (5 曲)
4. 未練・慰め (5 曲)
5. 子どものいる離別 (3 曲)
6. 恨み [非難、報復、後悔、羨望など] (10 曲)
7. 思い出の場所 (5 曲) の 7 つの主題に分類した。これらのうち、Nanyo sakura 以外は、失恋に関するものである。

歌詞に用いられる日本語としては、「つら

い、苦しい、はかない、悲しい、情けない、やさしい、なつかしい、安心」などの感情、「いつも、時代、日暮れ、夜、夜明け、たそがれ」などの時、「さよなら、さらば、お大事に」などのメッセージ、「夢、思い出」などの当事者の記憶、「波止場、風、水、親、故郷」など当事者の環境、「別れ、消えていく」などの状態を表現するものからなる。使用頻度としては感情表現が高く、とりわけ「つらい」「苦しい」のように当事者のネガティブな感情を訴えるものが圧倒的である。ところが、多くのパラオ日本語歌謡には、長調の旋律とノリのよいビートでアレンジされたキーボード伴奏がついている。

演歌・軍歌風とは、いわゆるヨナ抜き音階を中心とする旋律のことで、替え歌にも多い。演歌や学校唱歌のなかにも見られるように、曲中で第4音、第7音を使用しているも経過音としてであったり、旋律の中心的動きにあまり影響しない部分であったりするものも含む。西洋風とは、機能和声的に旋律が進行するものである。これらの旋律には日本起源のもの、日本経由でもたらされた西洋のポピュラー音楽からの借用、戦後欧米から直接もたらされたポピュラー音楽からの借用が含まれる。

調性については、42曲中6曲(約14%)が短調、残りが長調である。しかも、「恨み」の主題からなる15曲のうち短調は1曲のみに過ぎない。このことから、パラオ日本語歌謡は明るい長調、暗い短調という調性のイメージと歌詞内容とを単純に結びつけていないことがわかる。

基本的拍子については、3/4拍子は4曲(9%未満)と圧倒的に4/4拍子であり、主題による規定はない。ただし、実際の演奏ではしばしば1節のフレーズを引き延ばすことが行われ、採譜すると変拍子を含む表記になる場合が多い。

曲調としては、南洋風が19曲(約45%)、演歌風(軍歌風)が13曲(約30%)、演歌の要素(ヨナ抜き音階)も入った南洋風が3曲(7%以下)、西洋風が6曲(約14%)、西洋風の音進行を含む南洋風が1曲(2%以下)となっているが、演歌風に演歌の要素をもった南洋風、西洋風に西洋風の音進行を含む南洋風を加えると、それぞれ16曲(38%)、7曲(16%)となる。

以上の分析結果から、パラオ日本語歌謡は日本の流行歌に影響されて成立したというよりは、パラオの人々が主体的に日本の流行歌の旋律を参照したといえる。

(5) 採譜付き歌詞集の編纂レコーディング  
これまで収集したデータをとりまとめるとともに、沖縄パラオ友好協会が収集していた曲などを加えて、歌詞集として編集するのは50曲とした。

特徴としては、表紙のデザインにパラオの伝承(ニワトリ)やモチーフ、取り上げた歌

を象徴するイラストを入れたことがあげられる。また、口絵写真に調査協力者の顔写真を入れ、歌詞集がパラオの人々の協力によって成立したことを強調した。さらに、伝統的な古謡と同様、パラオ日本語歌謡が土地や場所との結びつきが大きいことがわかったため、歌詞に関わる場所やそれを示唆する写真を掲載することとした。

歌詞集に用いる言語は、わが国の科学研究費助成事業であることから、日本語の表記、現地の人々への還元の意味でアルファベット表記および英訳によるものとした。

#### 引用文献

Yamaguti, (Yamaguchi), Osamu 1967  
The Music of Palau: an Ethnomusicological Study of the Classical Tradition.  
M.A.thesis (Music), University of Hawaii.  
山口修 1969 「パラオ音楽分類学」 野村良雄先生還暦記念論文集編集委員会編 『音と思索』 pp. 533-541, 音楽之友社.  
山口修 1990 『水の淀みから ベラウ文化の音楽学的研究』 大阪大学博士論文(文学)。

Abels, Birgit 2008 *Sounds of Articulating Identity: Tradition and Transition in the Music of Palau, Micronesia*. Logos Verlag.

小西潤子 2003 「ミクロネシアの行進踊り その伝播とパラオにおける様式変化を中心に」 『阪大音楽学報』1, 33-45.

小西潤子 2004 「行進踊りと日本語混じりの歌 ミクロネシアの民俗芸能に見る日本の植民地教育の影響に関する歴史的研究」 『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』35, 97-111.

Nagaoka, Takuya and Junko Konishi 2007 *Western Culture Comes from the East: A Consideration of the Origin and Diffusion of the Micronesian Marching dance. People and Culture in Oceania*, 22, 107-136.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Inaka mura (田舎村)の音風景 パラオ現代歌謡に見る音と心 2014年6月 『日本サウンドスケープ協会 2014年度春季研究発表会論文集』 査読無 pp. 15-19 小西潤子

パラオ日本語歌謡の歌詞と旋律の分析 「失恋の恨みごと」の表現をめぐって 2014年3月 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌 『ムーサ』 査読有 15, 1-17 小西潤子

〔学会発表〕(計 15 件)

「パラオの歌心 ウタホンとレコーディングをめぐって」 2015年3月28日 第32回日本オセアニア学会研究大会 於：プラザ

ホテル山麓荘 小西潤子

「南洋と日本語歌謡」 2015年1月9日  
東洋音楽学会沖縄支部第63回定例研究会  
於：沖縄県立芸術大学 小西潤子 ハワード・チャールズ(パラオ・コミュニティ・カレッジ准教授)

How Palauans adopt the Japanese music since the 1920s?: Analysis of lyrics and melody of a song genre called *Derrebechesii* 2014年12月3日  
Pacific History Association 21st Biennial Conference 2014 於：台湾 Junko Konishi

パラオ現代歌謡に描かれた自然と心の風景 2014年9月6日 2014年次日本島嶼学会五島大会 於：五島市総合福祉健康センター 小西潤子

パラオの現代歌謡とその広がり キリギリスがバドワイザーになった?! 120. 2014年6月28日 日本音楽学会西日本支部大20回例会 於：同志社女子大学今出川キャンパス 小西潤子

Inaka mura (田舎村)の音風景 パラオ現代歌謡に見る音と心 2014年6月1日 日本サウンドスケープ協会 2014年度春季研究発表会 於：東京大学農学部2号館化学第一講義室 小西潤子

パラオ現代歌謡の日本語と音楽にみるパラオ的表現 2014年3月21日 第31回日本オセアニア学会研究大会, 於：高知市国民宿舎桂浜荘会議室 小西潤子

Musical Communication between Okinawans, Mainland Japanese and Micronesians before World War Two 2013年10月13日 IMS-EA 2nd Biennial Conference The 2nd Biennial Conference of the East Asian Regional Association of IMS, 台湾, Junko Konishi

海を渡った日本語と音楽 パラオの歌を事例に 2013年9月1日 人間文化研究機構第21回公開講演会・シンポジウム『海を渡った日本語』, 於：一橋講堂 小西潤子

パラオの歌謡とその社会 日本とローカル文化を接合するものとして 2013年7月27日 東洋音楽学会 2013年度第1回沖縄地区例会 於：沖縄県立芸術大学 小西潤子

パラオ現代歌謡のテーマ分類と音楽表現 その集大成に向かって 2013年6月9日 第11回日本音楽表現学会大会 於：いわて県民情報交流センター 小西潤子

パラオにおける日本語歌謡 2012年3月 上利老師・大野老師・小西老師特別講演 主催：台湾政治大学 於：台湾 小西潤子

Introduction of Palauan Music and Culture 2012年2月 Youth Activity Promote Project Meeting 主催：サザンクロス大学観光レジャー仕事センター 於：ヴァヌアツ Junko Konishi

Blood, knowledge and Identity : A Consideration of Contemporary Palauan-Japanese songs 2012年2月 グリフィス大学コンセルヴァトワール・リサー

チセンター・サザンクロス大学観光レジャー仕事センター共同シンポジウム 於：オーストラリア Junko Konishi

交差する音楽表現 日本と南洋群島 2011年6月 第9回日本音楽表現学会大会 於：上越教育大学 小西潤子

〔図書〕(計2件)

歌と踊り 伝統の創造と継承 2015年2月 明石書店・印東道子編著『ミクロネシアを知るための58章』pp.133-136、第2版のための改訂 小西潤子

「南洋踊り」が物語る歴史 小笠原の超越性と多文化性 2012年3月 藤原書店・別冊環 『日本の「国境」問題 - 現場から考える』, pp.354-365 小西潤子

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小西 潤子 (Junko Konishi)  
沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授  
研究者番号：70332690

### (2) 研究分担者

ダニエル・ロング (Daniel Long)  
首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授  
研究者番号：00247884